

9 同世代の脱走——ヨコハマ港から世界に向かって

秘密組織のアジトだって、本当かしら？

読売新聞の夕刊社会面トップに八段記事で、大きな文字の横見出しで「脱走米兵援助組織の全容」という記事が載っていた。「教授、労組幹部ら 全国五十カ所 三百人が手引き」という縦の見出しと大きな写真もあって、「ここに秘密の連絡場所が——江戸川橋近くのコの字型アパート」という写真説明がある。四十年以上前のこと、一九六九年（昭和四十四年）二月二十六日であった。二十三歳だった私は、ヒヤーと驚いた。それは私のことだったから。大新聞の読売新聞夕刊が社会面トップ、写真入り八段抜き記事で私のことを書いていたのだから、これは驚く。

写真は江戸川アパートの正面から中庭に入って夕方に写したもので、中庭の電灯のあたりと六階建て一号館が写っていた。「秘密の連絡場所」だとかいう、私たちの住んでいた四組一階二八号室も写っている。

その記事によれば、「脱走米兵を日本から国外に脱出させるベ平連の地下組織「ジャテック」(反戦脱走兵日本技術委員会)は、これまで完全な秘密のベールに包まれていたが、日米治安当局の約一年にわたる合同潜行捜査で、このほどその組織や出国ルートの全容が明らかになった」と書かれている。「大げさだ」と思いながら読んでいけば、脱走兵援助組織ジャテックの手によって、日本からソ連経由でヨーロッパに脱出した脱走兵(キャリコート)が、数ヶ月でスウェーデンの生活が嫌になってアメリカに戻って、CIAとか海軍調査部(NIS)に話したことをもとにしているらしい。

説売新聞によるキャリコート供述によれば、「ベ平連幹部に連れられて、新宿・江戸川橋近くのEアパートに連れて行かれた。そこでM早稲田大学教授に引き渡され一泊。翌日夜、M教授の長男で大学生のK君(二)に連れられて大阪へ」とあって、このM教授は、明らかに室勝早稲田大学助教授、つまり私の父マサルであって、長男K君はこれもどう考えても私のこと。もともと私は次男であり、二十三歳であったのだが。そして大げさに「ジャテックの秘密連絡本部」とされたEアパートは、「新宿・江戸川橋近く」と場所が指定されていて写真が載っているのだから、私たちの住んでいた江戸川アパートのことだろう。誰が見たって、そんなことはわかる。

私たちから見れば、これはまったく大げさなでっち上げであった。説売新聞はアメリカの情報機関、日本の警察からリークされた情報を、そのままの検証もなしに載せたのだろう。もともとその中には「事実」もあって、だから話はややこしくなる。

しかしこれがどれだけ本当であるかは別として、大新聞が夕刊社会面トップで報道したとなれば、みんなが注目する。まず江戸川アパートの住人、それに周囲に住む人たちは驚いたと思う。

えっ、この江戸川アパートが秘密組織の連絡先？

ムロ先生が脱走援助組織ジャテックの幹部？

ケンジ君が地下組織の活動家なの？

ということになって、次の日から江戸川アパート中庭を歩いたら、住人が私たちをジロジロと見る、ということも、実はなかった。

父マサルはいつもと同じように、中庭を通り抜けて大学に行ったり、母ユキコは中庭で花いじりをしてから、近所に夕食の買い物に行った。夜は二人とも江戸川アパート地階の共同風呂に行って、いつもの通りに生活をしていた。それで誰も私たちを特別扱いすることもなかった。私たちはみんな知らんぷりをしていた。当時（一九六〇年代後半）、日本の世論はベトナム戦争に批判的で、ベトナム反戦運動に対しては好意的だったので、説売新聞が私たちを犯罪者のように扱って報道しても、ほとんどの人が私たちが悪いことをしているとは思わなかった。しかしみんな、「ねえ、ここが秘密組織のアジトだって、本当かしら」とウワサをしていたことだろう。

早稲田大学の方の反応は、マサルが説明してくれたところによれば、新聞記事がでた次の週の教授会にマサルが出席すると、みんながギョッとして、いつせいにマサルの方を見たそうである。

マサルの所属していた教授会は、政治的な案件に関しては、日本共産党を支持する教授たちと当時の新左翼を支持する教授たちが争っていて、マサルはリベラルだが非活動的な人間とわかれていて、両方の陣営が自分の陣営に引き寄せようとしていたわけで、それが一夜にして米軍脱走兵援助の地下組織ジャテックの大物となったのだから、「えっ、あのムロ先生が」と共産党派も新左翼派も驚いたらしい。

教授会が終わると、親しくもない教授が数人マサルのところにやってきて、「ムロ先生、今回は大変でしたねえ」とねぎらって、マサルが「いやあれば、まったくのウソですよ」と言うと、「いやあわかります、そうでしょう。わかりますよ。大変なことをなさっていてご苦労様です」と真面目な顔で言ったそうだ。

「あの人たちは私のことを、小田(実)さんや鶴見(俊輔)さんのような活動家で、名前をださずに地下活動をしていたと思っていたんだよ。否定すればするほど、そう信じている」とマサルはちよつと愉快そうに言っていた。実際マサルは、ほんのときどきデモに出てくるだけであつた。この事件は深刻ではあつたが、小さなことを大げさに騒ぎ立てる喜劇のようでもあつた。母ユキコの方も父と同じように平気で、この事件を大変な迷惑とは思っていなかったようだった。中庭で庭いじりをして、ふつうに近所の人と挨拶をしていた。

ところが説売のジャテック報道はこの夕刊記事だけではすまなかつた。数週間後の週刊説売の三月

十四日号に、「あばかれた根室ルートの秘密 ベトナム戦争反対を唱えるベ平連の秘密組織「ジャテック」(反戦脱走米兵援助日本技術委員会)の協力者とは、いったい、どんな人たちなのだろうか」という「協力者」を掲載した六ページの記事が掲載された。さてそこでは、もはやM教授とかK君というようなイニシアルではなくて、M教授は早稲田大学室勝助教授として顔写真まででているし、K君は謙二君とこれも本名で報道されている。

取材を受けたマサルはその記事の中で、私(ケンジ)の江戸川アパートの五階の部屋(独身部屋)がジャテックの本部と報道されたことに関して、「三疊に押し入れといった、ベッドと本箱だけでいっぱいになってしまふような狭い部屋ですよ。「ジャテック」の本部がそんなにチャチですかねえ」と切り返している。

反軍活動に関する上院公聴会

あの時代、ドミノ理論にとりつかれていたアメリカは、南ベトナムが共産化されたらドミノ倒しのように次々とアジアは共産化されていくと信じて、南ベトナムに共産主義の防波堤の傀儡政権を作り、北ベトナムと南ベトナム解放戦線との戦争に深入りしていった。そしてこのベトナム戦争は、世界の多くの国の批判をあびて、ベトナム反戦運動も世界各地ならびにアメリカ国内で広がった。

私が参加していたベ平連(ベトナムに平和を！市民連合)も、このような反戦平和運動のひとつで